

七世紀初期インドの宗教事情と

仏教の基盤

(大唐西域記研究 1)

高 橋 堯 昭

普通インドの思想史の流れは、バラモン教より、釈尊の自覚即ち仏教の成立。原始仏教より部派仏教へ、その大衆的な考え方が「アウフヘーベン」されて大乘仏教に展開する。そして更にヒンズー教の成立によってバラモン教思想が復活したと直線的に考えられている。

果して、そうであろうか。私は否、むしろ異層的・階層的に考えらるべきであると思う。

強いて言えば、この問題はインド社会の複合性の中に求めらるべきであると思う。

従て、この問題に対決するため、且つその理解を早めるため、少し冗長ながら、玄奘の大唐西域記を表にして見た。これは大乘小乗の所屬の解ったものだけで、異道ばかりの所は抜いたが、或はこの異道だけの所が重要であるかも知れない。

まづ、別表で次のことを注意されたい。

(1) 国又は寺が、大乘であるか、小乗か。

(2) 外道が多いか否か、更にその場所は。と

これによって、私は概略の七世紀初頭の宗教の現況と、ひいては仏教自体の性格をよみとろうとするのである。

私は玄非の記録そのものが、厳密に統計に適しているとは思わない。なぜなら加畢試が国として「並多習学大乘」と言っているにも拘らず、その国の中で「大城の東の方、三四里にして北山の下に大伽藍あり、僧徒三百余人あり、並びに小乗の法教を学べり。」とあるから、これを一率に同一次元として、大乘何ヶ所、小乗何ヶ所と表すことは無理である。然も見た通り、大体の所は国として「○○国の伽藍何ヶ所、並多○乗」と、おまかに言っているに對し建駄羅の如きは、「布路沙布羅のカニシカ大塔は小乗。布色羯邏伐底の故伽藍は皆小乗。跋房沙城の一伽藍は「並大乘」。「仙魔の西北百余里、大山の南の伽藍は大乘」と、非常に詳細に明示しているから、唯これを數的に加えるだけでは、統計にならない。文中の表現のニュアンスも併せ考えなければ、厳密なものとならない。そのことを十分承知しつゝ、敢て冒険を犯すのは、概略の状況でもつかみたいからである。

こうして、計算すると、

有	部	14
正	量部	20
上	座部	2
説	出世部	1
小	乗ともの	16
大	衆部	3
大	小兼学	15
大	乗	24
大	乗上座部	5
計		100

となる。こゝで注意すべきことは「並大乘」とか「並皆大乘」とあることである。これは漢文で「並」は普通は、皆と訳される。他方「小乗を習学しているが、併せて大乘を学す」とも考え得る。こう考えると、大乘を専修するところがなくなってしまう。大乘が全然印度にないことはないし、又来号で詳述の予定だが、大乘はその否定的契機として、有部をはじめ、部派仏教を研究するが、小乗では原則として大乘の教儀を研究することはないから、やはり、これは「普通は」或は「皆」と訳すべきではないかと考える。これは Thomas Watter の英訳西域記 *On Yuan Chawang's Travels in India* で「皆な大乘」といっているから、私の独断でもあるまゝ。

更に、注意さるべきは、玄奘の特殊な用語に当惑する。即ち「大乘上座部」という矛盾な表現である。玄奘は非常に嚴密な表現をする人だから、不用意な発言とは考えられない。まして西南インドに二ヶ所然も「大小二乗兼学」の隣国に記しているのだから、重大である。釈尊成道のガヤの摩訶菩提僧伽藍（セイロン王の奉獻）の僧が「大乘上座部」といっている。^①これを Watter 氏は「上座部の大乘への折衷主義者 (1000ecclesiastics all mahayanist of the Shavira school)」と註では「特殊な意味に於ける大乘教徒、…結局大乘教徒」と言っている。これは前述の如く小乗では大乘を兼学することを原則としてしないから、むしろ大乘に近い方と考えられる。又一方これを「大乘」と「上座部」に分けて考えると二様に考えられる。同一人がこれを兼学する場合は大乘に近いことは前述の通りであり、且つ又「大乘」を習学する者もあれば、又「上座部」を習学するものもある。というようにも考えられる。とにかく、私は「大乘仏教がそこにあつたか否かを問題にする私の現在の立場では、「大乘上座部」という表現の中、^②③いづれにしても大乘仏教がそこに存在したことが分れば足りる問題である。

ちなみにラモットや平川彰氏はこの「大乘上座部」を「上座部」の中に入れていますが、浅学の私にはもっと研究の

大唐西域記による大小乗及びヒンズー教の地域別分布比較表

㊤ 西 域

地 方	国 名	伽 藍 数	僧 数	大 小	外道天祠	人 数	仏教に對する優劣
① 新天山北路 天山南路	阿 耆 尼 国	十余	二千余	有 部			
	屈 支 国	百余	五千余	有 部			
	跋 祿 迦 国	数十	千余	有 部			
	羯 盤 陀 国	十余	五百余	有 部			
	烏 緱 国	十余	減千人	有 部			
	佉 沙 国	数百ヶ所	万余	有 部			
	斫 旬 迦	数十あれど毀壞多	百余	大 乘			
	瞿 薩 且 那 国 (干闥)	百有余	五千余	大 乘			
	縛 活 活 国	百余	三千余	小 乘			
	安 咀 羅 縛 国	十余	数百	大小兼学			
② アフガニスタン	揭 職 国	三ヶ所	数十	大衆部			
	梵 衍 那 国	十余	三百余	有 部			
	加 畢 試	数十	数千人	説出世部			
	沙 落 迦 伽 藍	百余	六千余	大 乘	数 十	千余人	塗灰,徒
	漕 矩 吒	数百ヶ所	三百余	小 乘	数 十		
			万余	大 乘			

(註) 現在のカブール辺から南(所謂ガンダーラ)に大乘が出て来る。

㊤ 北インド(玄奘の区分による)

地 方	国 名	伽 藍 数	僧 数	大 小	外道天祠	人 数	仏教に對する優劣
北インド	濫 波 国	十余	寡 少	大 乘	数 十 五 百 数	甚 多 甚 多 異道雜居	多数異道 正信少
	那 揭 羅 曷 国	荒蕪	寡 少				
	健 駄 羅 国	千余(摧殘荒廢)					
		① カニシカ大塔	減 少	小 乘			
		② 布色羯羅伐底城北千生捨眼	寡 少	小 乘			
		③ 跋 嚩 沙 城 外 東門外一伽藍	五 十 余	小 乘			
		城 東 五 十 里	五 十 余	大 乘			
			少 一	大 乘			
			一 万 八 千 少	大 乘			
			→ 減 少				
	烏 伏 那 国	雖 多 既 荒 蕪	寡 少	大 乘	十 余	甚 多	仏法を信 ぜず
	咀 叉 羅 国	① 捨身の北一	百 余	大 乘			
		口 弧 山 中 一	二 百 余	大 乘			
	烏 刺 戸 国	一	寡 少	大 乘			
	迦 湿 弥 羅 国	百余	五 千 余	中 小 乘 推 大			
		① 大山に 一	三 十 余	大 衆 部			
		② 一	百 余	大 衆 部			
	曷 邏 闐 補 羅 国	十余	寡 少	大 乘			
	伐 刺 拏 国 (アフガニスタンに近くクエッタ附近)	数十(荒圯)	三 百 余	大 乘			

(註) この地域は大乘が優勢、(ガンダーラだから)

◎ 中 印 度 (1)

地 方	国 名	伽 藍 数	僧 数	大 小	外道天祠	人 数	仏教に對する優劣
	石 磔 迦 国	十			数百の福舎		仏法信少 仕天神多
	至 那 僕 底	奢羯羅故城中	百 余	小 乘	八		
	闍 爛 達 羅 国	十	三 百 余	有 部	三	五百塗灰	
	屈 露 多 国	答 秣 蘇 伐 那	二 千 余	大 小 兼 学 部	十 五		
	設 多 凶 盧 国	五 十 余	二 千 余	大 多 小 兼 学 部			
	波 理 衣 咀 羅 国	(庭宇荒涼)	寡 少	小 乘	十 余	千 余	
	秣 菟 羅 国	(傾毀甚)	二 千 余	大 小 兼 学 部	五		
	薩 佗 泥 湿 伐 羅 国	三	七 百 余	小 多 少 兼 学 部	百 余		異道甚多 異道甚多 不信佛法
	罕 祿 勤 那 国	五	七 千 余	小 多 少 兼 学 部	百 五		
	秣 底 補 羅 国	十 德 光 伽 藍 城	八 百 余	有 小 乘	十 五		
	波 羅 吸 摩 補 羅 国	摩 裕 羅 城	寡 少		福舎多、浴		
	瞿 毗 霜 那 国	五	百 余	小 乘	十 余		
	垂 甕 掣 咀 羅 国	二	千 余	正 量 部	三 十 九	三 百 余	
	毗 羅 剛 拏 国	十	三 百 余	大 乘 部	五 十		崇信外道 少敬佛法
	劫 比 他	二 四	千 余	正 量 部			
		三 道 宝 階 伽 藍	数 百 人	正 量 部			

(註) 東に進むにつれて外道の勢力増大。小乗依然強し。

中 イ ン ド (2)

地 方	国 名	伽 藍 数	僧 数	大 小	外道天祠	人 数	仏教に對する優劣
	羯 若 鞠 闍 国 (曲女城)	百 余	万 余 人	大 小 兼 学 部	二 百	数 千	邪正相半 す
	阿 踰 陀 国	納 縛 提 婆 矩 羅 城 中	五 百 余	有 部	十		異道寡少
	阿 耶 穆 佉 国	百 有 余	三 千 余	大 小 兼 学 部	十 余		
	橋 賞 弥	五	千 余	正 量 部	十 余		
	韓 索 迦 国	十 余	三 百 余	小 乘	五 十 余		外道定多
	室 羅 伐 悉 室 国	二 十 余	三 千 余	正 量 部	五 十 余		外道定多
	劫 比 羅 伐 罕 堵 国	数 百、圯 壞 良 多。	寡 少	正 量 部	百 余		外道甚多
	拘 尸 那 揭 羅 国	一	三 十 余	正 量 部	百 余	万 余	異道雜居
	婆 羅 那 斯 国	故 基 の み	僧 な し				
	戰 主 国	三 十 余	三 千 人	正 量 部	二 十		
	吠 舍 釐 国	鹿 野 伽 藍	千 五 百 人	正 量 部	十		
	宮 城 北	十	減 千 人	小 乘	数 十		邪正雜信
	弗 栗 特 国	伏 鬼 の ス ト ウ ー バ の 伽 藍、数 伽 藍 多 傾 毀	尚 有 僧 徒 3 乃 至 5 倍 稀 少	大 乘			
	尼 波 羅	数 百、多 已 圯 壞 存 一	寡 少	正 量 部	数 十		
		湿 吠 多 羅 僧 伽 藍	衆 僧 消 滅 四 千 余	大 乘			
		十	減 二 千 余	大 小 兼 学 部	数 十		外道定多

(註) 仏教の寺数に對し天祠数は数倍

余地がある。

大体大小の比は四対六（概略）で、これも法顕の時より、大分増えては居る。即ち法顕では烏伏那国が「五百僧で皆小乗、又犍陀衛国が多く小乗。（玄奘では大乘）又マガタ国も「阿育王塔辺に摩訶衍僧伽藍を作る。又小乗の寺あり、都合六七百僧」が「伽藍五十余、僧万余、並多習学大乘教法」の玄奘では二百年の間に大乘がふえては居る。然し、小乗の寺は依然として多い。

然してこの表に於て興味をひくのは、

- (1) 所謂ガンターラ地区とマガタ国に大乘が多い。
- (2) 大乘の訳経僧達の通つたであろう、天山南北路で、干闥チンタラ、研旬迦ヤンシュンカを除いた国々は有部であり、又ガンターラの北限、加畢試以北は小乗、特に有部が多く。又ガンターラでも、大乘仏教の寺院と相隣して、有部の寺が大きな勢力をもっていたことが読みとれる。即ち先に引用した、迦畢試の「北山の下大伽藍、僧徒三百、並小乗」の如くである。（小乗がいつまでも残るところに私はインドの自然と何かしら相関がありはしないか、この問題を次号の「大乘小乗」の両者の関係で考えたい）
- (3) 特に問題なのは、仏教より異道の勢力が大きい所は文中のニュアンスやはっきりと「異道オウダウ寔多」の文、又伽藍数や僧徒の数と、天祠（異教の寺）と人数を比較すれば、はっきりする。即ち中インドでは異道が非常に多く、半島の東側も多く、内陸インドでは異道が極めて多い。これに対して、この地域では大乘仏教が少いことは興味をひく事実である。
- (4) マガタ国はインド中原でも、ナーランダの仏教大学の設立、人材の蝟集から、この国だけは大乘が多いのは当然

であり、又密教の成立等仏教最後の拠点になるのである。このマガダに距離的に近いオリッサ州の烏荼のギリ遺跡などはナーラングの影響で大乘であったことは勿論である。

更に先にものべたが、マガダでも、小乗が依然として大乘の中に存在する。

6、更に特記すべきことは、西インド、インダス河口地帯に異道の進出もあるも、大小兼学大乘上座部と大乘が生き或は正量部等が非常に多く存在し、且つ玄奘の記録から見ると、仏教の盛んなること、インドでは最高のように感ずる。そして玄奘の南インド旅行も、この地方を習学的目標にしたということも、うなづける。



こう考えてくると、何かこの表の中に、法則性が、よみとれるような気がしてならない。

更に、それがひいて仏教の本質を物語っているように思われる。これの理解を便にするために、表とすると、次の如くなる。

① 大乘はガンダーラと西南インドのいはゞ周辺部に残る。(マガダは別として)

② これと逆に、異道はガンジスの周辺から内陸部に多い。

私はこの①と②とに何かしら相関関係があり、然もこれが、インド史の特性、ひいては仏教の性格を表現しているのではないかと考える。



仏教が最初から衰えていたのではないことは勿論である。あのアソカピラー、ストウバや磨崖証勅が西はアフガニスタンのカンダハルの砂漠から東はビルマ国境近くまで建立され、各地に荘大な伽藍、ストウバが立ち並んでいたさ

まは、現存の遺跡や、西域記の内容から、うかがわれる。これが七世紀のはじめにすでに無に帰そうとしている。例えば、中インドの設多國の「伽藍十余あれど、荒蕪甚しく、僧少し」。南インドの秣羅矩吒國の如く「故基のみ僧なし」という、かなしい状況になっている。

歴史のないインドで唯一の記録たる法顕伝と西域記に示される二百年に、その衰退のテンボが象徴される。

1、即ち那揭羅局（ナガラハラ）の仏影窟は

法顕―鮮明に射影している。

宗雲 「容願挺持、世所希有」

玄奘 「近代已來 人不徧觀」

2、健駄羅（カンダラ地方）

法顕 弗樓沙國（ベシャワール）で仏鉢盛んに供養

玄奘 「王城東北故基、昔仏ノ宝台也」とあって仏鉢はもうないことを示している。

更に有名なカニシカ大塔について

法顕「衆宝校飾、凡所_二經見_一塔廟。莊嚴威嚴都無_二此比_一。」

とあるが、玄奘ではそれ程でなく、更に、この大塔の西に故伽藍あり、圯毀して僧減少。近くの脇尊者の室も傾き世親か阿毗達俱舍論を製せし所も、「故房」となっている。

その外、布色羯羅伐底の故伽藍も、堂宇荒涼、その東北、跋房沙城の近くの山寺も廢居。唯城のそばに小乗と大乘の伽藍に少数の僧を集めて居るにすぎない。

このように玄奘の旅した頃は、仏教は昔日の面影なく、到底、現在発掘されている華麗なカンダラ仏が、全域の無数のストゥーバから出土しているのは、うそのような気がする。

この地方の仏教の衰退の原因は明らかに蓮華面経にシンボライズされるミヒラグラの破仏によるものであることは否定出来ぬ。然し何か外に本質的な原因があるのではないかと思う。もしミヒラグラを代表とする白フンの破仏が原因であるとするならば、白フンの来ない所は安全であった筈である。この問題にアプローチするために、次に中インドを見て見よう。



釈尊の生涯中、重要な拠点となっていた舍衛城、即ち「室羅伐悉底国」は「伽藍数百、圯壞良多。僧徒寡少……天祠百所、外道甚多」と昔日の面影はない。これは最早法顕の時も「城内人民希曠、有百余家」とあり、或は有名な逝多園（給孤独園）も玄奘の時は「堂宇傾圯、唯余故基」とあり、傍に「左柱に輪相を鏤み、右柱に、その上に牛形を刻めり」のアソカピラーが「諸行無常の祇園精舎」を示すのみである。

更に釈尊出世の「劫比羅伐窰堵」も、無常の風から逃れなかった。

法顕の時は「城中都無王民甚坵荒。只有衆僧、民戸數十家而已。」が玄奘の時に至っては「空城十数、荒蕪已甚、王城頽圯、周量不詳……空荒久遠、人里稀曠。伽藍故基十有余。宮城之側有伽藍、僧徒三十有余人。」と更に玄奘のあと八十年におとずれた、慧超は「彼城已廢。有塔無僧、亦無百姓」。往彼禮拜者甚難、方迷。」とあり、又義浄の大唐西域求法高僧伝には、そこに現れている求法僧四十人中、この地をおとずれる人が最早、ほとんどなくなっていることか推測される。従って、その靈跡及びそこにある伽藍の衰滅のテンポの急速な進行が伺われる

然して、この原因は、この霊跡が、ネパールよりで、インドの中原から離れている為、政治的文化的にとり残されたと考えられる。

たしかに、それも一理はあるであろう。然し、この統計表をみても、或は玄奘の本文をみても、このガンジス流域の仏教が、これと同じ運命を荷っていることはすぐ理解されよう。異道寔多と天祠の数が如何に多いか、一目瞭然である。

では政治の中心であったマガダ周辺は如何であったろうか。

やはり、こゝも同じ運命が、待ちうけている。かの「鱗次した」「伽藍窣堵婆の余祉、数百あれど、存するもの二三のみ」或は無憂王の八万四千塔も「窣堵婆の基址は傾陥して、覆鉢のみ勢を余す」「或は窣堵婆はあれど、傍の伽藍は絶えて僧なし」の文字が、いたずらにくり返されるに過ぎない。

これは釈尊入滅の聖地クシナガラに於てもそうである。玄奘の書風の中に、どうしても僧が大勢居たとはうけとられない。

それでも、当時の仏教の中心地、僧徒数千並俊才高学、徳重声馳異城のナランダをひかえた、このマガダには仏教の息吹が感ぜられるのは、せめても西域記を読むものなぐさめである。

然しこのマガダも「天祠数十、異道寔多」と、こゝもヒンズーの勢力の増大の枠外ではなかった。

この傾向は東南インドに向つてもそうであり、内陸インドに至ってはほとんど仏教はゼロとなる。即ち馬祀の礼の復活後、仏教の栄えたアンドラ国も「異道寔多」の文字をくり返し、隣の駄那羯僕迦国も「伽藍鱗次するも、荒蕪すること已に甚だしく、」先王の建てた「弗波勢羅僧伽藍(東山)」「阿伐羅勢羅僧伽藍(西山)」は「仏滅千年の中

は毎年、千僧安居、千年の後は凡聖同居、こゝ百年は僧侶なし、空荒となり、復僧侶なし」の言葉を残すのみ。

このように、七世紀初頭のインドに於て仏教は全域にわたって、唯、命脈を保っているにすぎない程度で、強いて言えば、ナールンダ、摩訶刺陀国や摩臘婆国の如く、大学としての僧伽が、その繁栄を保っていて、宗教的な主導権は異道即ちヒンズー教にその席を譲ったといっても過言でない。

しからば、仏教はなぜ、このように衰えなければならなかったらうか。

私はこの手がかりとして西南インドの仏教の現存状況に注目したいと思う。

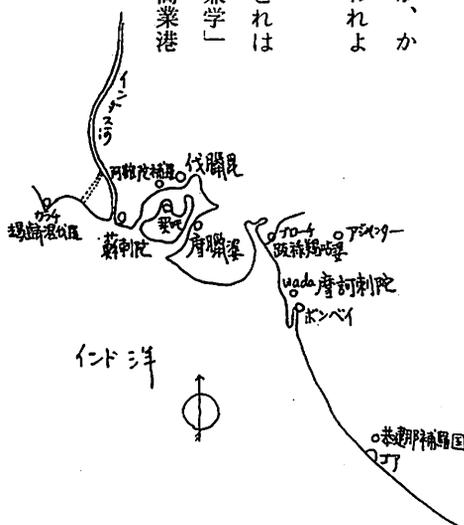


又理解し易くするために西南インドの地図を参証して置きたい。

この地方は現在には非常に文化的におくれた地方になって了ったが、かつて如何に文化が栄え、富裕であったかは、西域記の文中にも伺われよう。即ち

現在のマイソール州の **Kharapur** に仏教の大遺跡がある。これは「恭建那補羅」の跡であり、玄奘の「伽藍百余、僧徒万余、大小兼学」の所である。然してこゝは西歐のインド侵略の基地で、旧くから商業港であったゴアから、七八十軒の所である。

更に現在インド最大の商業港ボンベイのやはり七八十軒北、**maharatha G wada** の遺跡がある。これは玄奘の「摩訶刺陀



國」で当時、伽藍百、僧數五千人、大小二乘兼學で異道疑多にも拘らず、大きな力を残している。

こゝは Sarga 河によって海と連絡し、Agashi や mahabin の昔の良港に接している。

ローマとの通商港として有名なブローチは玄奘の跋祿羯帖婆で「利海為業」がこの消息を示し、こゝに伽藍十餘三百人の僧徒が「大乘上座部」に従っていた。

更に「摩臘婆」はカッチ草原地帯に通ずる海溝に沿う地帯で、古来よりブローチと並び稱される良港である。こゝは伽藍數百ヶ所、僧數二万余、正量部でインド最大の隆盛を誇っている。

カッチ草原の「伐臘毘」が「居人殷盛、家居富饒。積財百億。乃有二百余室。遠方奇貨、多聚其國」と表わされている如く、百万長者ならぬ百億長者が百余もあることからいって、その商業貿易の隆盛さが想像されよう。

然もこゝは極めて仏教が盛んで、南海寄帰内法伝卷四に「多在那爛陀寺、或は居跋臘毗國。斯兩処者、事等金馬、龍門闥里。英彦雲聚。」とあり、又ナーランダの巨匠徳慧堅慧の因縁の地であり、寄帰伝の如く中印度の方からも學僧の遊學が多かった。又玄奘の時でも「異道疑多」の中で、アジャンタ大窟寺を作った阿折羅阿羅漢の大伽藍をはじめとして、百餘の伽藍と六千の僧を有していた。(正量部)

又インダス河口の蘇刺佗國は「居人殷盛、家畜富饒。当西海之路、人皆資海之路、興販為業。貨選有無。」の如く海外貿易によってさぞかし、アラビヤや西方の國々の船の出入が多かったことであろう。

こゝには伽藍五十餘で三千餘人の僧があり然も「大乘上座部」と玄奘が言っているように大乘が生きていた。

又この隣の契吒國は「人戶殷盛、家屋富饒」とあるから、こゝも通商港で、大小兼學千餘人の僧をもっている。最後にパキスタン唯一の國際港であるカラチの古名「鳩隣湿伐羅」(阿点婆翅羅國に属す)が八十餘の寺院と五千

人の僧を持って居たのは数の上でも極めて僧数の多い部類に属す。

こう考えて来るとこゝに一つの法則性を読み取ることが出来よう。

即ち、こゝに挙げた地帯は、いづれも西方貿易の中心地であることは述べるまでもない。

シルクロードによる通商の拡大は、ラクダや馬の背では限界があり、又回教の侵入によって、ローマとの通商の中断は、加畢試^{カピシ}あたりから、カブール河へ、ガンダーラに来てインダスの本流へ、或は川舟で或は川沿いに、このインダス河口の港に集散せしめられる。又インドの物産もこゝに集められる。更にインド洋の季節風の発見という歴史的事件によって直接ローマ、エジプトに交易される。

為に本文中に随所に見られるように豊かな富がこの地に蓄積された。

これはこの辺一帯や半島南部でローマの金貨が出土することからも言える。然し半島南部の方が多くて、ブローチのナルマター河口やインダス河口の出土が少ないのは、半島南部より通商が少ないことを示すのではなく、南インドのタミール族はローマの金を直接使用したが、こゝでは改鋳して使った程、逆に大量に金貨が流入す（高田氏仏像の起源）る程、経済が高度に進展していたことを示すに外ならない。

このように、仏教、特に大乘仏教の盛んな場所と、通商貿易による広い世界への視野の拡大、貿易中継地としての国際性、所謂開かれた社会への進展とは偶然の一致ではない。

これは又シルクロード沿いの国々、殊に広義のガンダーラに、アレキサンダー以来、バクトリヤ、サカ、パルティア・クシヤン等民族が共存する普通の世界に大乘仏教が発展したことゝまさに規を一にする事件であり、且つ又これが仏教の本質的性格を表すのではないか。

私はこれは又仏教成立そのものに根ざす、根本的性格であると考える。

そも、仏教の成立した時代相、政治的には十六ヶ国部の部族国家が、やがてマダに統一されて行く時代。経済的にはガンジス中流の肥えた土地を求めて下って行った民族が、こゝに定着、ようやく、生産性の向上によって、村落部族だけの経済からもっと広い、経典の言葉をかきれば「舍衛國に五百の賈客あり、他邦に往詣せんとす、曠野に……」の曠野險難所を行く、広域遠隔経済へと進展して行く時代。更に思想的にはクルの国土のバラモンの咒術性から解放された新天地へ、カースト制度や社会の閉鎖性から脱し、恰も経済が貨幣価値のもとに一切が一元化されるように、皮膚やカーストが、慈悲と平等の理念のもとに否定される清新な時代相、これを端的に自覚したのが、仏教の成立であった。故に仏教は閉じられた社会から、開かれた社会へ志向性を自身にもっていたのである。

更に、仏教はアソカ王が全インドを「一つの印度」として統一せんとする意欲の、その指導理念として、生々たる活力をもつて居た。

然し余りにもアソカ王の時代は短く、全印度の広大な国土に対しては、その広大な理想は、彼の権力をもつてしても、上をなせに過ぎなかった。依然として印度の社会には、カースト的な閉鎖された社会が現存していたのである。為にアソカ王の死後、その国土が四分五裂して、互いに覇を争うような状況に至るや、社会が閉鎖化し、沈滞し、早速、馬祀の礼（ヒンズーの儀式）が復活する。更に国家が相争うとなると通商も、まゝならず、又外国貿易で得る莫大な利に目をつけた封建領主は、商人の商業権を奪取する。西洋のようなギルトの発達していないインド商人の権力を取ることは又赤子の手をひねるようなものであった。かくして、商人階級の力は無力化し、衰滅する。為に最大

のスポンサーであり、且つ又仏教の理念と共通の地盤に立つ商人階級の没落は、又仏教の衰滅に通ずるのは理の当然と言わねばならぬ。然も仏教は農民の中に侵透しなかった。相変らず農民はヒンズーのカースト的世界に居た。そもく、釈尊はクシャトリア（王族）の出身で、六師外道の哲学を媒介して仏教の体系を作った。従って仏教の思想そのものに貴族性・思弁性の限界があった。インドの泥の民衆にとっては、余りにも、高尚すぎたのである。これは仏弟子でさえ、僧伽に四姓が解放されていたにも拘らず、バラモンや、クシャトリアの貴族出身者が多く、下層階級にはついて行けなかったのが実情ではなからうか。即ち伝説の「賤民出身」のウパリーは増谷氏によれば「賤民出身とするのは後代の所伝で文献にはない」という現状である。私はインド的自然にとっては、むしろヒンズーの方が適しインド人の言う「仏教は菩提樹に咲いたバラの花のようである」と、所詮たくましい強大な菩提樹のインド社会にとって仇花の如く考えるのは、この閉鎖的社会をインドとするなら、仏教はまさに異質なものであったかも知れない。段々、中原地帯が固定化閉鎖化して来ると、仏教は一つは南方アンドラに、又西北ガンダーラにその活路を求めて行く。然しこのアンドラ仏教も、アマラバーティやナガルジュニコンダ（龍樹布教）の仏教文化の華をさかせるがやがて閉鎖化が進むにつれて消滅して行く。

更に西北インドに基盤を求めて行く方は、その格好の世界を見つくる。

即ちガンダーラは言うまでもなく、シルクロードの分岐点で、ヘルシャ・ローマはもとより支那への通商の地帯である。かのアレキサンダー大王の東征以来、ギリシャ文化の流入あり、そこには開かれた世界、普遍的世界が展開する。これは遊牧民の出であるクシャン王朝に於て、その極に達する。そもく、遊牧民は定着民のように保守性が無い。頼る土地がないからだ。今日は、こゝに居るかと思えば、明日は遙か彼方の異民族と接している。彼等には民族

や種族を超えた「普遍・平等」が原則となっている。更に加筆試でフランス隊が発掘した物の中に、大量のローマのガラス器、インドの象牙彫刻或は支那の絹等が同一場所で発見されたのは、このクシャン王朝の開かれた世界、普通の世界を示す何よりも大きな証拠である。

こゝに仏教の本来の性格が一致、安住し、仏教は小乗より更に普遍的な大乘に發展する。

これは逆に、この世界なくば、法華経の「臨欲終時、而今其子、辣会親屬、国王大臣皆已集」の国王大臣まで枕頭に、はべらせる強大な経済力は成立しなかつたらうし、又かのガンダーラの無数のストウパの奉獻や仏像の奉獻も出来なかつたであらう。

これは又西インドでも言いうること、海外通商、特に海上貿易による大量の物資の交易の隆盛地で、仏教と商業の結びつきが大きいことは玄奘の記録に明らかである。



仏教は商業と結びついてきたと述べたが、単にスポンサーとしてのそれではなく、むしろ私の言いたいののは、その商業の国際性、普遍性に仏教の理念との合一があり、為に長者、商人の帰依があつたといいたい。為に小乗より大乘の方が共感を呼ぶのは当然であり、商業地には大乘が成立し又安住するのは当然である。然し一方カニシカ舍利器がその蓋の中央に仏陀、左右にブラーマンとインドラのヒンズーの神を立てていることに象徴されるように、又コインに仏陀ばかりでなく、ヒンドウーの神を描いているのは、あの仏教を保護したカニシカ王でさえ、如何とも出来ぬ強大なインドの底辺にある閉された村落生活にむすびついたヒンドウー教の力を如何とも出来なかつたこと示すと考える。これは八万四千の塔を建てたアソカ王でさえ、異道に布施をおこたらなかつたことから十分推測されよう。

要するに、このインドの社会の二元性に、仏教は農民にきりこめなかつた所に、仏教の衰退の因があつたであらう。

マックスウェーバーの「東洋には都市はなく、閉ざされた農村社会のみである」の言葉そのまゝに、閉ざされた社会がひし／＼とインドを全域にわたつて覆つて行く、その経済の沈滞と文化の砂漠化が拍車をかけて来る。

この閉ざされた社会がおしよせるにつれて仏教はより弘い、開かれた世界めざして努力して移りすむ。

(パーラ朝の密教の成立は最早や「開かれた社会」がなくなつたインドで仏教がその一元化へ真剣に対決したいわば背水の陣といえよう)

即ちインドの中原から遠心的に普通の世界を求めて出て行く

まづアンドラ地方へ 又南方インドへ

又ガンダーラへ 又西南インドへと

周辺に向つて、あとから、ひし／＼と閉ざされた世界が追いかけて行く。

最後の安住の地のガンダーラも、クシャン王朝の形成期や発展期をすぎると、一つのかたまつた国として定着して、又固定化がはじまる。これは潑刺たるガンダーラ仏がクシャン王朝の固定化と共にヒンズー化して了う彫刻史の立場からも見られる所であり、大唐西域記に、加畢試国に天祠が見えはじめ段々南へ来るに従つて多くなるのは、クシャン王朝の普遍的世界が崩壊して閉鎖的世界がおしよせていることを物語つてゐると思ふ。

かくして仏教は十二世紀の回教の侵入をまたずに、その生命を閉じようとしていた。即ち基盤たる社会の姿容によつて衰滅の色が、いよ／＼濃くなつて来る。

西南インドの普遍的な世界に安住する仏教も、「異道定多」の表現の如く、閉ざされた世界がもう目前にせまっていたのである。

参考文献

- 大正蔵五一、大唐西域記
全 法顯伝一
全 南海寄州伝
國訳一切経 大唐西城記
長沢氏訳 大慈園寺法師伝
足立喜六氏 大唐西城記研究
静谷氏 インド仏教碑銘目録
高田氏 仏像の起源
Thomas Watter, On Yuan Chwang's Travels in India
Unigtham The ancient Geography of India
Konoa Kharosht Inscriptions
Tarn The Greeks in Bactria and India
史学雑誌五一— 印渡河口の諸國 足立氏